VI

ポンポナッツィ

Pomponazzi

1462-1525

伊藤和行

Kazuyuki Ito

1　アリストテレス主義哲学者

北イタリアで活躍したアリストテレス主義者

ピエトロ・ポンポナッツィ（一四六二―一五二五）は、一六世紀初頭に北イタリアで活躍したアリストテレス主義哲学者である。中世が「アリストテレス哲学の時代」と呼ばれるのに対して、ルネサンスは「プラトン哲学の時代」とみなされてきた。一五世紀後半にはフィチーノらによってプラトンのほか、プロティノスやプロクロスの著作が相次いで翻訳され、西欧の思想界に大きな衝撃を与えた。その一方で、ルネサンスのアリストテレス哲学は中世スコラ哲学の亜流とさえみなされてきた。しかしフィチーノとピーコ・デッラ・ミランドラが一五世紀末に亡くなった後、イタリアにおいて最も独創的な哲学者と言えば、それはアリストテレス主義者のポンポナッツィである。彼は人文主義やプラトン哲学も取り入れ、新しいアリストテレス解釈を試みた。霊魂論などで示される彼の徹底した自然主義は、近代の夜明けを告げる性格を帯びていたと言えよう。

新しいアリストテレス解釈を試みる

パドヴァ大学に入学

ポンポナッツィは北イタリアのマントヴァで一四六二年に生まれ、一四八四年にパドヴァ大学に入学し、哲学を学んだ。パドヴァ大学はボローニャ大学と並んで、北イタリアを代表する大学であり、その医学部はヨーロッパ各地から学生を集めていた。また中世以来のアリストテレス哲学研究でも知られ、その学風は「パドヴァ・アリストテレス

主義」と呼ばれている。彼は一四八七年に学芸学部で学士号を取り、一四八八年から一四九六年まで自然哲学を教えた。一四九六年には医学で博士号を取得し、中世の哲学者ウィリアム・ヘイツベリーの学説に関して『最大と最小について』という論考を著している。三年ほどフェッラーラの宮廷に滞在した後、一四九九年にはパドヴァに戻り、自然哲学の教授となる。哲学、論理学、自然学、霊魂論などのアリストテレスの著作について講じたが、一五〇九年にカンブレー同盟軍によるヴェネツィア攻撃のために大学が閉鎖されると、フェッラーラ大学に移った。一五一一年にはボローニャ大学で教授に指名され、一五二五年の死までその職にとどまっている。彼の主要な著作が執筆されたのはボローニャ時代であり、そのなかには主著『霊魂不滅論』のほか、『滋養について』、『宿命、自由意志、神の預定と摂理について』、『魔術について』がある。また大学での講義にもとづくアリストテレスの著作（『霊魂論』、『自然学』、『動物部分論』など）に関するいくつかの注解が残されている。

ボローニャ大学

霊魂の不滅性は哲学的には論証できない

ポンポナッツィの名前を一躍有名にしたのは、一五一六年に刊行された『霊魂不滅論』である。その中で彼は、霊魂の不滅性は哲学的には論証できないと論じたが、その主張に対しては多くの攻撃がなされ、宗教的異端の嫌疑をかけられた。一五一三年に、第五回ラテラノ公会議は、霊魂の不滅性をカトリック教会の教義として宣言しており、大学教授に対しては、それから逸脱する学説を講じるときにはキリスト教信仰の正しさ

公の場で著作が燃やされる

を教え、それに反するような哲学的議論を批判することに最大限の努力を払うよう命じていたのである。彼は、枢機卿ピエトロ・ベンボの庇護によって宗教裁判を回避できたが、ヴェネツィアでは公の場で著作が燃やされ、みずからの見解を弁護する著作を書くことを余儀なくされた。それは『弁明』（一五一九年）と『アゴスティーノ・ニーフォに対する弁論』（一五一九年）である。この論争のため、彼は、『宿命、自由意志、神の預定と摂理について』や『魔術について』といった他の著作を生前には刊行することはなく、いずれもその死後になって初めて世に現れたのだった。

アリストテレス哲学研究の大きな転回

ポンポナッツィは、大学でアリストテレス哲学を学び、講じ、それに関する著作を残した点においてまぎれもなくアリストテレス哲学者だったが、ガリレオの著作で戯画化されているような後ろ向きの哲学者ではなかった。ルネサンスには、アリストテレス哲学研究自体が大きく転回しているのである。第一に、人文主義の影響の下で、アリストテレスの著作のギリシア語原典による研究と新しいラテン語訳が作成された。中世で用いられていたテクストの誤りや不適切な翻訳が改められ、ギリシア＝ラテン語対訳という形式でテクストが出版されている。第二に、中世にはほとんど顧みられることのなかったアリストテレスの著作が研究されるようになった。『詩学』、『ニコマコス倫理学』、『政治学』、『修辞学』、そして『動物誌』などの生物学的著作が検討されることによって、中世とは異なるアリストテレス像が誕生している。第三に、中世においてよく論じられ

た著作に関しても、ヘレニズム時代のギリシア語注釈書が知られるようになって、アリストテレスの学説の批判的研究が進められるようになった。そのなかでも重要なのは、アプロディシアスのアレクサンドロス、シンプリキオス、テミスティオス、ピロポノスらであって、彼らから刺激を受けて『自然学』や『霊魂論』といった著作に関しても新たな議論が繰り広げられるようになったのである。

さらにプラトン哲学やストア哲学といった復興した古代哲学がアリストテレス研究にも影響を与えている。このようなアリストテレス哲学研究の革新は「アリストテレス・ルネサンス」と呼んでもよいかもしれず、ポンポナッツィは、アリストテレス哲学の改革者として歴史の中に登場したのだった。

2　自然主義

❖霊魂の不滅性

『霊魂不滅論』

『霊魂不滅論』（一五一六年）で論じられている霊魂の不滅性という問題は、けっして新しいものではなく、アリストテレス以来、多くの議論がなされている。とりわけ、一二世紀の西欧世界にアリストテレス哲学が紹介されたときには、キリスト教信仰との整合性をめぐって生じた諸問題のなかでも最も重要なものとして、霊魂の不滅性と世界の永

キリスト教の教義とアリストテレスの学説をどのように調和させるか

受動知性と能動知性

アヴェロエスは個人の霊魂の不滅性を否定

遠性に関して、キリスト教の教義とアリストテレスの学説をどのように調和させるかということが問われた。

アリストテレスは『霊魂論』第三巻において、能動知性を論じたさいに霊魂の不滅性を否定したとみなしうる記述をしており、この一節の解釈をめぐって議論が沸き起こったのである。アリストテレスによれば、人間霊魂は、受動知性と能動知性という二つの知性をもち、前者は感覚的器官によって得られる事物の形相を受け取るのに対して、後者は感覚的器官によらずに事物の本性を認識する。したがって、前者は身体とともに滅びるが、後者は不滅である。よって人間霊魂は、受動知性の視点からは可滅的であるが、能動知性の視点からは不滅的であると考えることが可能になる。

このアリストテレスの霊魂論をめぐっては、古代世界でも多くの哲学者が論じているが、ポンポナッツィに大きな影響を与えているアプロディシアスのアレクサンドロスは、能動知性を神と同一視し、人間は受動知性しかもたないと主張した。人間の認識活動は質量的知性すなわち受動知性によって行われ、それが身体と不可分である以上、霊魂も身体とともに滅びるのである。また西欧中世におけるアリストテレス解釈に大きな影響を与えた、中世イスラームの哲学者アヴェロエス（イブン・ルシュド）は個人の霊魂の不滅性を否定している。受動知性も能動知性もそれ自体としては単一かつ永遠のものである。なぜなら知性によって認識されたものは絶対的であり、それを担いうるのは神的

知性のみだからである。人間知性は、人間において神的知性との結び付きから生じるのであり、よって身体が滅びるときには人間知性さらには霊魂も滅びる。

中世スコラ哲学は、第一にキリスト教教義とアリストテレス哲学の融合を介してキリスト教神学を構築することを目指した。その試みの代表者はトマス・アクィナスであるが、トマスは、霊魂を身体の形相とみなすが、霊魂は質料がなくともそれ自体だけで存在しうるとする。動物の霊魂は身体器官に依存する感覚的活動しか行わず、受動知性しかもたないので身体とともに滅びるが、人間の霊魂は、理性的活動を行い、能動知性をもつことによって不滅である。しかしトマスは、アヴェロエスと異なり、受動知性の単一性も能動知性の単一性も認めず、個人の霊魂の不滅性を主張したのだった。

トマス・アクィナスは霊魂の不滅性を主張

ポンポナッツィは、『霊魂不滅論』において、それまでの議論を逐一検討したうえで、アプロディシアスのアレクサンドロスの解釈にもとづき、知性の本性についての考察から霊魂の可滅性を証明しようと試みた。知性を含む霊魂の全活動は身体器官と不可分に結び付いているので、身体が滅ぶときには霊魂も滅びるのである。彼はまず、問題の核心は、不死的なものと可死的なもののあいだにある人間の中間的本性にあると言う。人間霊魂は、植物的霊魂、感覚的霊魂、知性的霊魂という三つの霊魂からなるが、前二者は、その活動が身体器官を通じて行われるので、身体が滅びるとともに滅びる。一方知性的霊魂の活動は身体器官を必要としないので、不滅的と考えることができる。人間霊

問題の核心は人間の中間的本性にある

魂において、不滅性と可滅性という相反する性質があることから、霊魂の不滅性をめぐってこれまでさまざまな見解が出されてきた。彼は過去の見解を次のように四つに分類する。

(1)個人の霊魂は可死的だが、万人に共通の霊魂は不滅である（アヴェロエスとテミスティオス）。
(2)個人は可死的な感覚的霊魂と不死的な知性的霊魂をもつ（プラトン）。
(3)個人の霊魂は端的には不死的であり、ある点では可死的である（トマス・アクィナス）。
(4)個人の霊魂は端的には可死的であり、ある点では不死的である（アプロディシアスのアレクサンドロス）。

人間霊魂は物質的でもあり非物質的でもある

ポンポナッツィは最初の三つの見解を検討して斥けてから、第四の見解を支持する議論を展開している。その理由は、人間霊魂の本性にある。すなわち人間霊魂は、端的には物質的だが、ある点では非物質的であるから、その本性も、絶対的には可死的であるが、相対的には不死的である。人間霊魂は、認識形態によって、知性体と感覚的霊魂の中間に置かれる。知性体は認識にさいして身体器官を必要とせず、普遍的なものを認識

対象とするのに対して、感覚的霊魂には身体器官の活動が不可欠であり、認識対象としての物体を必要とする。人間霊魂は両者の中間にあって、知性体のように普遍的なものも認識可能であるが、普遍的認識は直接なされるのではなく個別的なものを通じて行われる。すなわち自然の対象物から感覚器官を通じて得られた表象像を通じて、普遍的認識はなされるのである。したがって人間知性の認識には表象像を造る身体器官の活動が不可欠であり、絶対的には身体器官の滅亡とともに認識も消滅する。このように、人間は認識活動から見ると、身体器官がまったく不要な知性体と、身体器官に全面的に依存する動物の中間にある。

人間は知性体と動物の中間

以上のような人間霊魂の本性から、霊魂は端的には可死的であるが、ある点においては不死的であるとポンポナッツィは結論する。この結論が最も哲学的合理性に適合していると彼は考えている。しかし彼は、この問題は、哲学によっては確証できないものであると繰り返し述べる。霊魂が不死的であることも可死的であることも、哲学的には同様に論証できるのである。これが、それまでこの問題に関する論争に決着がつけられなかった理由でもある。しかし、キリスト教信仰からは、人間霊魂は不死的であるという結論が与えられている。この問題には哲学的には確実な結論を与えることはできず、信仰上の問題として最終的な判断が下されるべきである。

『霊魂不滅論』におけるポンポナッツィの最終的な見解は、それまでの議論を無意味な

哲学的考察とキリスト教信仰とを分離

ものにするように思われるかもしれないが、それは同時に、哲学的考察とキリスト教信仰とを分離し、前者を後者から独立した知的活動として擁護するためのものと考えられうる。実際、霊魂の不滅性というキリスト教信仰の重要な教義に関わったために、彼は宗教的異端の嫌疑をかけられたのだった。彼が『霊魂不滅論』において展開した議論の多くはアプロディシアスのアレクサンドロスにもとづいており、彼の独創性は、さまざまな議論を踏まえて、一貫した考察を展開したところに見出されるのかもしれない。しかしながら、徹底した哲学的合理性にもとづく考察は、運命と人間の自由や奇跡を扱った他の著作においても展開されており、自然主義とも言うべき独自の思想を構成している。

自然主義とも言うべき独自の思想を構成

❖奇跡をめぐって

『魔術について』

『魔術について』（『自然の諸結果の原因あるいは魔術について』一五二〇年。以下、『魔術について』）において、ポンポナッツィは、奇跡や魔術的な行為を超自然的なものとみなす見解に対して、自然の活動の結果であると体系的に批判した。見かけ上は非自然的な現象の背後には自然的な原因があることを繰り返し説明している。奇跡は、神霊（ダイモーン）といった非物体的な存在の作用によるとされるのに対して、彼は、神霊の存在は合理的には論証されず、そもそも非物質的な存在は物体的な存在に直接的には作用で

非物質的な存在は物体的な存在に直接的には作用できない

きないと主張する。惑星のような天体の運動が、永遠的な存在と生成消滅するものとの仲介として働いている。もし非物質的な存在が物体的な存在に直接働きかけるとするならば、前者もまた後者から影響をこうむるだろうが、これは不可変的であるという非物質的な存在の本性に反しているのである。

魔術師が行う治療は呼び出された神霊の力によるとされるが、それに対しても彼は、治癒は自然の原因によると主張する。すなわち治癒をもたらしたのは神霊ではなくて、魔術師自身なのであって、彼は病気を治療する「隠れた」力をもっているのである。薬草や動物が病気を治癒する「隠れた」、しかし自然な力をもっているように、人間がそのような能力をもっていても不思議ではない。病気の治療は、治療をする者のもつ「隠れた」力や、薬草などの自然の事物が備えている「隠れた」力に関する知識によるものとみなされるべきである。

驚異と呼ばれ、超自然的な存在が介在するとみなされる現象も、自然的な原因による説明が可能であって、その原因が理解されれば、もはや驚異ではなくなる。実際、それらは、星辰の影響、地上の存在の「隠された」能力、集合的な想像力によると説明される。たとえば、嵐のさいに人々が聖人に祈りを捧げたところ、嵐がやみ、聖人の姿が空に現れたという事件は、けっして超自然的な原因によるのではない。ポンポナッツィは、人々が聖人の姿を見たことは認めるが、それが天使や神霊、神の働きによることは疑っ

ており、その人々自身によって生じたと考える。その姿は、祈りを捧げる人々の意志の力が自身の想像力によるイメージを空中に投影したか、あるいは人々から発散された蒸気に後で現れることになるイメージが刻印されていたことによるのである。

聖書に述べられている奇跡

しかしキリスト教における奇跡に関する自然主義的な説明には、その信仰と相容れないおそれがあった。自然主義を徹底することはあらゆる奇跡の否定を導き、神や天使の介入を否定することにつながるのである。そこで、彼は、聖書に述べられている奇跡は自然の通常の活動を超えたものであって、自然の秩序を超えて、神や天使によって直接、惹き起こされたとする。キリストによるラザロの復活といった奇跡については、それが真理であることは啓示が保証しているとし、先ほどの聖人の姿が現れた事件の説明のさいには、人々の聖人崇拝に対して好意的な叡知の介入の可能性を示唆するのである。

❖運命と自由意志

『宿命について』

『魔術について』で示されていた自然主義の試みは、『宿命、自由意志、神の預定と摂理について』（一五二〇年。以下『宿命について』）においては、人間の自由意志という問題に関して展開されているが、そこではいっそう困難なものとなっている。なぜならば、アリストテレス＝ストア的伝統にもとづく哲学的決定論は自由意志の否定を導くからであって、人間の意志にもとづく活動の説明においては、人間の内的決定と外的運動によ

る支配という対立が生じざるをえないからである。

『宿命について』では、前半部と後半部において、根本的に異なる二つの見解が併置されていた。最初の二巻では、自然主義にもとづき、自然界と人間の意志に関する強い決定論が主張されている。アリストテレス＝ストア哲学に倣い、自然界におけるすべての事象は因果の秩序によって支配され、人間の行動も例外ではないと考えられる。そしてその秩序は、最終的には第一動者かつ第一原因である神に辿り着くのである。したがって宇宙の全事象は偶然に起こることはなく、必然的に生じるのである。われわれがある事象を偶然起こったとみなすのは、その原因を知らないからであって、偶然とはわれわれの無知の投影にほかならない。われわれは因果の連鎖における全要素を知りえない以上、その結果の必然性も知りえないのである。しかしその原因の必然性は知られないとしても、その結果が生じることには変わりがない。人間の意志もこの因果の連鎖の中にあり、われわれが競合する選択肢のあいだで決定するさいにも、なぜその選択肢を選択したかを考察するならば、その選択の理由は、われわれにとっては外的な原因にあることが見出される。われわれの意志による自由な選択のように見えるとしても、それは、その選択の隠された原因を認めることができないというわれわれの無知によるものなのである。

偶然とはわれわれの無知の投影

後半の三巻では、トマス・アクィナスとドゥンス・スコトゥスにもとづき、人間の自

人間の自由意志と神の全知全能との調和

由意志と神の全知全能との調和というキリスト教に関わる問題が扱われている。神は全知であるから、未来の全事象について知っており、したがって人間の全活動も神によって予見され、それ以外の行動はできず、人間の自由は存在しないことになる。それに対して、ポンポナッツィは、神の全知には真に偶然的な要素が含まれており、それが未来を人間によって決定可能なものとすると述べている。すなわち神は未来を、完全に実現された現実態としてとともに、いまだ決定されざる可能態としても予見するのである。この未来観は時間の本性を反映するものであり、それが人間の自由に対して余地を残している。神は、その全能を行使するにさいして、時間の特殊性を保持するために、未来を未決定で偶然なものとして前もって決定しているのである。ポンポナッツィは、偶然的決定論によって、人間の意志に対して自由な選択を行う可能性を保証しようと試みたのである。

偶然的決定論

人間意志の自由――自然界の因果律を打ち破る奇跡

しかしながらポンポナッツィにおいては、人間の能力も自然の因果律によって必然的に決定されるという決定論的自然主義の要請と、そのような物質的限定を乗り越えうる人間意志の自由という二つの要請とが十分には調停・解決されず、未解決のまま残されていると言えよう。自然主義を強く主張するほどこの対立は深刻なものとなり、自然の因果的秩序の中に人間という存在も含まれることを考えるとき、人間意志の自由とは、自然界の因果律を打ち破る奇跡とも言うべきものなのかもしれない。人間とは、自然の

一部でありつつ、自然を超越する存在でなければならないのである。

❖哲学と宗教――自然主義の問題

哲学的論証と哲学的合理性の追求

ポンポナッツィが、霊魂の不滅性、奇跡、宿命（運命）と人間の自由という問題をめぐって一貫して展開したのは、自然研究における哲学的論証そして哲学的合理性の追求である。それは、霊魂の不滅性の問題におけるように、キリスト教信仰との緊張関係を余儀なくされるものでもあった。しかしこの緊張関係は、一二世紀にアリストテレス哲学がヨーロッパ世界に紹介されたときにすでに生まれていたものである。アリストテレス哲学をキリスト教神学の基盤に据えようとするならば、両者の整合性は必然的に核心的問題とならざるをえなかった。一三世紀に大きな発展を遂げた中世スコラ学はこの整合性を求める活動であったが、哲学研究はあくまで神学研究のためのものとされ、中世の学問的中心地だったパリ大学においても、神学部が中心であり、哲学は神学研究の準備として学芸学部で教えられたのである。そして学芸学部における哲学研究と神学部における神学研究とのあいだには、しばしば緊張関係が生じている。◆1

◆1…この緊張関係は、一二七七年に司教エティエンヌ・タンピエによって出された二一九の誤謬命題に対する異端宣告（『一二七七年の禁令』）に表れている。Cf. E. Grant, *God and Reason in the Middle Ages*, Cambridge, 2001.

一方中世後半の北イタリアでは、パリとは異なる状況が見られる。ボローニャやパドヴァといった大学では法学部や医学部が中心であり、哲学も神学とは独立したものとして研究することが可能だったのである。その結果パリでは異端へつながるものとして批判の対象だったアヴェロエスのアリストテレス解釈が、ルネサンスにいたるまでアリストテレス哲学理解において大きな影響を与えたのである。そこでは、哲学的研究はキリスト教信仰からは独立した営みとして、その自立性が主張されたが、その立場はしばしば「二重真理説」と呼ばれてきた。しかし彼らはけっして真理が二つあるとは述べておらず、哲学的教説とキリスト教信仰とのあいだに齟齬が生じたさいには、真理は信仰にあることが認められていたのである。ポンポナッツィにおいても、この哲学と信仰の関係は、霊魂の不滅性、奇跡、宿命をめぐる議論において明瞭に示されていることは先に検討したとおりである。彼は、自然主義の立場を徹底する一方で、哲学的考察によって得られた結論に対しては、一種の蓋然性を認めていた。人間の知識が人間という限定された存在による活動である以上、そこに神の活動のような絶対性を主張することはできず、哲学研究によって得られた結果も暫定的な性格を帯びざるをえない。この立場は一種の懐疑主義にもつながるものだったと言えよう。

「二重真理説」

パドヴァ・アリストテレス主義の伝統

パドヴァ・アリストテレス主義の伝統は、ルネサンスにおいて、プラトン主義や新プラトン主義、ストア主義、懐疑主義といった、さまざまな古代哲学の復興を契機として、

それらの思想を吸収することによってアリストテレス哲学を新たな視点で解釈するという試みを生み出している。ポンポナッツィの哲学研究はそのような試みを代表していた。彼の霊魂論は、新プラトン主義の影響を受けたアプロディシアスのアレクサンドロスから大きな影響を受けているし、宿命と意志の自由の問題に関しては、ストア派学説を高く評価していた。また霊魂の不滅性の問題への関心は、フィチーノの『プラトン神学』に呼び起こされたことが考えられるし、観想的な生活や道徳に対する実践的なものの擁護は、プラトン哲学やアリストテレス哲学には見られず、初期人文主義思想の影響と考えられる。このようにポンポナッツィは、アリストテレスのテクストを出発点としつつも、さまざまな思想を取り入れて、新たな方向性を模索していったと言えよう。

自然界に固有の理法に即して推論を進める自然主義

彼の哲学の核心とも言える自然主義は、自然界に固有の理法に即して推論を進めることにあり、その点において彼は近代科学と結びつけられることがあった。たしかに彼は、ルネサンスにおけるアリストテレスの生物学的著作研究の復興者でもあった。アリストテレスは、『自然学』や『天体論』のほか、生物に関して『動物誌』、『動物部分論』、『動物運動論』、『動物発生論』といった著作を残していたが、中世ではほとんど顧みられることがなかった。ポンポナッツィは、ボローニャ大学で数年にわたって『動物部分論』などに関して講義を行っており、自然哲学の一部としてアリストテレスの生物学を大学で講じた最初の一人なのである。アリストテレスの生物学研究、とくにさまざまな

アリストテレスの生物学を大学で講じた最初の一人

動物の形態を比較する研究は比較動物学の先駆とも言うべきものであって、血液循環の発見で知られるW・ハーヴィの研究を導いたものとして知られている。ハーヴィは、動物発生や血液循環の研究にさいして、アリストテレスの比較動物学的な研究方法を探求の指針としていたのである。◆2

それに対して、ポンポナッツィの自然主義は近代科学に直接結びつくものではなかった。彼はわれわれの理解しているような経験主義者ではなかったのである。たしかに彼は、アリストテレスの自然現象に関する具体的な記述に対して懐疑的なこともあったが、その説明においても、彼自身の経験にもとづく論証は見られず、実際に観察や解剖を行うこともなかった。その点においてはハーヴィとは異なっていた。ハーヴィはみずから多くの生物解剖を行い、比較することから生物に関する普遍的な考察を導き出そうと試みたのである。またポンポナッツィは、ガリレオのように実験によって経験を制御することも、自身の経験を概念的分析に結びつけることもなかった。彼は、第一に論理的分析そして概念的考察に卓越した哲学者であって、「科学者」ではなかったのである。しかしながら、自然に関する哲学的考察を自立した学問的営みとして展開したことは、近代における哲学研究の方向性を示唆していたと言えよう。

自然に関する哲学的考察を自立した学問的営みとして展開

◆2…ハーヴィの研究方法とアリストテレスの関係に関しては、R. French, *William Harvey's Natural Philosophy*, 1994 を参照。